

エイリアン研究員までの遠くて長い道のり

浜田 信夫

大阪市立自然史博物館

近年は、大学も様々な肩書の教授の方がおられるようです。名誉教授や客員教授は昔からあったのですが、特任、特命、特別、卓越、特別名誉教授という称号もあるそうです。

私の肩書は、大阪市立自然史博物館・外来研究員です。自己紹介した時に、外来という言葉に引っかかる人が多いようです。外来を英訳すると、外来患者さんならoutpatient、動植物の外来種ならintroduced species、外来思想ならforeign idea、外来者ならstrangerといったところでしょうか。ある関西のラジオ番組で、落語家の桂吉弥さんに「外来研究員とは？」と聞かれました。私は「英語に訳せばalien（エイリアン）になりますね」と答えました。すると、売れっ子落語家は、「エイリアンでも研究員なんですね。」と。

大学は薬学部でした。同級生の多くは4年で卒業したのですが、私は現在の薬学生と同様に6年間在籍していました。そして、国家試験を受けること13回目にしてようやく合格。友人にはラッキーサーティーンと呼ばれたものです。

その後、大学にしつこく粘り、農学部の大学院に進みました。キノコなどの下等生物の研究室に在籍し、研究テーマは、(藻類と菌類の共生体である)地衣類の生態やその培養法の研究でした。恰好をつけて言えば、地衣類を用いた今はやりの共生関係の解明でした。全く別の生物がなぜ仲良く暮らせるか？人類にとっても大きな教訓になる壮大なテーマでした。ただ、時代を先取りし過ぎたせいか、なかなか定職につけず、35歳までオーバードクターをしていました。今ではポストドクと呼びますが、その走りだったと自負しています。

そうして就職したものの、「なぜコケを研究していたものを、カビの専門家として採用するのだ」と、研究所の先輩から言われる始末でした。職場は、先年吸収合併されました大阪市立環境科学研究所というところで、カビの市民相談を主にしていました。お風呂のカビ、エアコンのカビ、洗濯機のカビなどの住環境のカビの生態が、主な研究テーマでした。幸運だったのは、誰もやっていない未知の分野の研究だったことです。“灯台下暗し”。あらゆる日本のカビ研究者が、たぶん世界のカビ屋さんが、どうせありふれたカビばかりだろうと思っていたからでしょう。界面活性剤が大好きなカビなど、ユニークなカビを多く見つけることができ、楽しい研究生活を送りました。ただ、“出る杭は打たれる”。ここでの研究生活も窮屈になったので、年金の受給資格のできる25年間ぴったりで定年退職しました。

定職を辞した後、外来研究員(食客)として10年の時が流れました。主な稼ぎは非常勤などのバイトですが、科研費などもいただいて、100歳外来を目指して研究する日々。植物標本に生えるカビなど、他人が研究したことのないテーマに取り組んでいます。

ところで、22年の5月末に、角川ソフィア文庫から、私の書いた『カビの取扱説明書』が刊行されました。まだの方は是非ご購入ください。楽しい本ですよ。税込990円。